401：*601*：*603*：*604*：*8*（気象学史；研究連絡会；古文書保全；マクヴェイン；世界気象会議）

第14回気象学史研究会「史資料の発掘・保全と気象学史研究―東北そして英国から」を開催

気象学史研究連絡会

第14回気象学史研究会を日本気象学会2023年度秋季大会（仙台国際センター）にあわせて2023年10月24日(火)に開催した．大会会場での現地開催にくわえてオンライン中継も行った．会場約10名・オンライン約35名あわせて約45名が参加した（第１図）．

今回は「史資料の発掘・保全と気象学史研究―東北そして英国から」をテーマとして，仙台在住の佐藤大介氏（東北大学災害科学国際研究所）と泉田重雄氏（建築史・技術史家，元・筑波大学講師）に講演いただいた．佐藤氏は東北地方に残された古文書に基づく江戸時代を中心とした歴史研究を行うとともに，これら記録の保全・継承のための研究・実践にも取り組んでいる．これらの成果は歴史気候学との連携も期待されている（鎌谷・佐藤 2020）．泉田氏は建築史・技術史家として近代日本建築史の研究の中で進めてきた明治政府の測量師長を務めたC. A. マクヴェイン（Colin Alexander McVean, 1838–1913）に関する研究成果を出版し（泉田 2022），マクヴェインが明治初年の日本の気象事業の開始など近代科学技術史においてきわめて重要な人物であることを示している．司会は市野美夏氏（人文学オープンデータ共同利用センター）にお願いした．市野氏は日記記録など歴史史料に基づく日射量の復元（市野ほか 2018）など古気候学の研究に加え，これら研究の元となる歴史史料に関する情報と経験を共有するシステム「れきすけ」の開発（Ichino *et al.* 2023）など，歴史研究においても大きな成果をあげている．

佐藤氏は「地域社会に残された古文書・古記録の保全」と題して講演した．推計20億点ともされる多くの古文書が日本の地域社会に遺されていること，こうした国・地域は世界でも日本の他にないこと，他方これらは危機に瀕しておりさまざまな要因が複合し「古文書大量消滅の時代」にあることが強調された．専門家が市民に呼びかける形で協働して古文書の保全や解読に取り組む活動が各地で試みられており，佐藤氏が宮城で取り組んでいる実例が紹介された．古文書の記録をもとにした気候復元などの研究も多く取り組まれているが，研究成果を市民にも還元することで，市民の研究への関心をさらに高め，研究者への信頼醸成に寄与すると結ばれた．

泉田氏は「マクヴェイン文書を通してみた1873年世界気象会議前後の日本」と題して講演した．マクヴェインは，これまで「マクビーン」の名で気象庁の歴史の最初に掲げられながら，どのような人物かほとんど知られていなかった．泉田氏は研究を進める中でマクヴェインのスコットランド在住遺族が保存していた日記・書簡等大量の資料と出会い，これらを丁寧に読み

第１図　第14回気象学史研究会「史資料の発掘・保全と気象学史研究―東北そして英国から」（2023年10月24日，仙台国際センター小会議室１）にて講演された佐藤大介氏（a）・泉田重雄氏（b）と司会を務められた市野美夏氏（c）．（d）秋季大会会場での現地開催に加えてオンライン中継にも多数の参加があった．

© 2024　日本気象学会

解き，日本の気象観測の創始についての多くの史実が明らかになったことを紹介された．マクヴェインと交友のあったイギリス最高の知性ともいえる多くの人物が東京に集まったことが，1875年6月から日本が世界標準の公式気象観測を開始することができた大きな要因であったことを述べて講演を結んだ．

参加者数はオンライン開催となった第7回以降では最も少なかった．今回の講演者はお二方とも歴史学分野の方で，気象学会員にはなじみの薄い方だったことも影響しているかもしれない．また当日は討論の時間が十分に確保できなかった．参加された方からは「違う分野の方の話をうかがって新鮮に感じました」という感想もいただいている．講演者のご了承をいただくことができ気象学史研究連絡会ウェブサイト（https://sites.google.com/site/meteorolhistoryjp/，2024.3.1現在）で講演動画を公開したので，参加できなかった方はぜひご覧いただき，質問・意見などもお寄せいただければありがたい．研究連絡会ウェブサイトの問い合わせフォームで受け付ける．多くの古文書は私有物であり所蔵者に保存・承継が任されている現状で，それらをどのように保全して広く歴史研究に活用していくか，今後の議論への足掛かりにできればと考える．

今回は秋季大会会場で現地開催したが，秋季大会に参加した方の参加は多いとはいえなかった．当日の大会日程終了後，1時間30分と時間が大きく空いてしまったことも要因の1つと考えられる．大会の口頭発表が行われた会場とは別の会議室で開催したため，準備のための時間を確保する必要などからの対応であった．大会で口頭発表が行われた部屋は当研究会の会場としては大きいもので，限られた資源からの判断であったが，大会会場における現地開催というメリットを生かしきれなかったことは反省すべきである．今後も開催方式の検討・見直しを行ってより活発な研究会となるようにしたい．

最後にご講演いただき，講演動画の公開もご了承くださった佐藤氏・泉田氏，司会をお務めくださった市野氏，前回に続きボランティアとして運営にご協力くださった遠藤正智氏・岸　誠之助氏（順不同）の各位に厚く御礼申し上げる．日本気象学会講演企画委員会及び日本気象学会2023年度秋季大会実行委員会から多くの支援を受けた．深く感謝申し上げる．本研究会の開催にあたっては学会の研究連絡会等活動補助金の支給を受けた．

参　考　文　献

市野美夏，三上岳彦，増田耕一，2018：日記天候記録から推定した日本における19世紀前半の日射量変動．地学雑誌，127，543-552.

Ichino, M. and K. Masuda, 2023: Rekiske: Interdisciplinary Platform for Sharing Knowledge and Experience of Japanese Historical Documents. Geoscience Data Journal 10, 63-72.

泉田英雄，2022：明治政府測量師長コリン・アレクサンダー・マクヴェイン：工部省建築営繕，測量，気象観測への貢献．文芸社，260pp.

鎌谷かおる，佐藤大介　編，2020：近世の列島を俯瞰する―南から北へ，気候変動から読みなおす日本史 第6巻．臨川書店，228pp.